

「県民と県議会との意見交換会」 **岩手町会場** の概要

〔日 時〕 令和 2 年12月22日（火）13：00～15：00

〔場 所〕 岩手広域交流センタープラザあい多目的ホール

〔テーマ〕 地域の資源を生かした交流人口の拡大について

〔参加者〕 （8名）

北 田 公 子（トラベル・リンク株式会社 代表取締役）

沢 田 昇 太（シェアハウス Your Base オーナー）

畑 めい子（株式会社八幡平DMO 代表取締役）

櫻 糺 哲 也（雫石町グリーン・ツーリズム推進協議会 会長）

江 頭 理 恵（雫石町 集落支援員）

中 橋 淳 也（株式会社岩手くずまきワイン 森のこだま館 館長）

木 村 元 思（一般社団法人葛巻畜産開発公社交流製造部 部長）

柴 田 和 子（アウローラ J 5 会長 園井恵子を語り継ぐ会 会長）

〔出席議員〕 （9名）

佐々木宣和議員（座長）、小西和子議員、名須川晋議員、柳村一議員、佐々木茂光議員、
高橋こうすけ議員、小野共議員、工藤勝博議員、千田美津子議員

〔オブザーバー議員〕 千葉伝議員

◆ 参加者自己紹介及び現在の業務や活動状況の紹介

○北田さん

盛岡市で着地型、いわゆる「インバウンド」を取り扱う旅行業をしている。インバウンドとは、訪日外国人旅行だけではなく、外からこちらに来る旅行であり、いわば岩手県を売っている。外から来る方を受け入れるため、岩手県の食や工芸関係のものづくり、自然を取り扱っている。

ツアーでは、飲食店と生産者をつなぐものや、移住・定住に結び付くようなものを実施している。縁結びのツアーも行っており、県内の方々を対象に地元で自信を持ってもらえるようなネタを提供し、独身男女の出会いの機会をつくっている。

また、地元の体験コンテンツの掘り起こしや、ガイドの育成などを行っている。

現在旅行業が逆の意味で注目されており、様々な人に今後どうするのかと聞かれるが、そこは未だ作戦を考えている。オンラインが普及する中でリアルの付加価値をどのように付けていけるのか、考えたいと思っている。

○沢田さん

青森県出身で、2年前に八幡平市に移住した。1年目にシェアハウスを立ち上げ、2年目の今年7月に36年間続いたスナックを事業継承し、クラウドファンディングで143万8千円の支援をいただき、スナックをスタートさせた。コロナの真ただ中だったが、地元の方々や盛岡市の知人などの助けもあり、黒字経営を続けている。

○畑さん

大学卒業後、フリーのコピーライターとして盛岡市で20年ほど活動していた。企業や飲食店等を様々取材し、企業のブランディングや魅力発信の仕事をしていくうちに、岩手県の魅力を改めて感じ、この魅力を地域外に発信していく活動をしたいと、仲間と2015年に株式会社クレセントを立ち上げた。

その後、地域のDMOとして、旅の目的地をブランディングやマーケティングし、発信していく仕事をしている。

八幡平DMOは、2018年5月に設立され、2019年に国の地域DMOに認定され、2020年の春に重点支援DMOに指定された。八幡平市にも観光協会があり、DMOがどういった立ち位置でどういった役割をしていくのかであるが、当初はインバウンド対応で考えられていた。将来的にはインバウンドを見据えてはいるが、今は旅行者の受入基盤整備をしている。IT化を進めることと、旅行を受け入れる地域の基盤づくりのために、観光コンテンツの磨き上げなどを行っている。

○櫻糺さん

雫石町グリーン・ツーリズム推進協議会は平成13年に設立され、私は2代目の会長である。他に花工房らら倶楽部という会社を20数年前に立ち上げ、代表をしており、農家レストランららも経営している。5年前くらいから長山街道の会を立ち上げ、点から線につなげて雫石町を知ってもらおうという活動をしている。その他、農協の理事や商工会の役員などを行っている。

○江頭さん

現在、雫石町の観光商工課で集落支援員をしているが、今年の3月まで同じ観光商工課で地域おこし協力隊として活動していた。現在の業務は地域おこし協力隊から引き続いていくものであるが、主な任務は、雫石町でも5年前からDMOを設立しようとしており、設立に向けてDMOの主な機能のPDCAサイクルを回すために、アンケート調査などをし、その結果の解析などを行っている。地域おこし協力隊の3年間で、年1回アンケート調査を行い、雫石町を訪れる方々について具体的なデータをまとめてきてきた。季節により訪れる方の構成が違うことなど、経験だけでは分からないことが見えてきた。このようなデータを基に観光戦略を立てたり、DMOの設立に向けての基礎データとして役立っている。

福岡県の出身であり、北国の生活はなかなか慣れないが、岩手県、雫石町をいろいろな方に知ってもらいたいと思い活動している。

○中橋さん

森のこだま館は、岩手県から指定管理を受けて管理している施設であり、岩手県北エリアの食や伝統文化を幅広く知ってもらうための体験やレストランを運営している。

ワイン会社であるので、レストランを通してワインのファンを増やしていこうともしているし、アクティビティを通して一日楽しんでもらえる施設にしたいと思っている。

最近はなかなかイベントなどを実施できず、毎年行っているワイン収穫祭も実施できなかったため、リモート収穫祭というイベントを代わりに開催した。50名程度の町内のお客様に新酒を味わっていただくとともに、アフターコロナにつながる可能性を考え、YouTubeなどを通して御自宅で収穫祭の様子を見ながら、予め送っていた無濾過の新酒を楽しんでもらうという企画を初めて行った。

また、葛巻町と共同して12月からくずまき鍋という企画を実施しており、第三セクターそれぞれの味の鍋を提供している。南部鉄器を使った鍋を使い、葛巻町の「ひぼがはっと」という幅広のうどんと、葛巻の食材を入れた鍋であり、当館ではトマトベースの鍋を一日10食限定で、3月末まで提供している。

○木村さん

葛巻高原牧場は、昭和51年3月に設立された公共牧場であり、最初は預託育成事業といった、生後3カ月以降の乳牛となるメスの牛を預かって育てることからスタートした。当初は町内の二、

三百頭程度の牛を預かる公共牧場であったが、徐々に規模が拡大し、今では栃木県、茨木県、千葉県などから約2千頭の牛を預託している。

また、当牧場の安定的経営のために、牧場の多面的な機能に着目して、事業を多角化してきた。人工授精などにより生まれた雄牛を育て肉牛にしたり、ミルクと肉を使った工場を作った。牛乳工場、チーズ工場、パン工場、精肉工場などを作り、そこで加工された食品を牧場に来たお客様に食べてもらおうとレストランを作り、長く滞在してもらうために宿泊施設を作り、全国でも珍しい、六次産業化した公共牧場となった。

コロナ禍において全国同様宿泊施設が大きな打撃を受け、製造は一時減少したが、スーパーマーケットなどで売れ行きが好調であり、事業の多角化で安定的な経営ができています。

今後、コロナ禍で事業を前進させるためには何をすべきか、今考えています。

○柴田さん

この建物は新幹線のいわて沼宮内駅の中にあり、新幹線が停まる、ということとは大きな意味を持つ。いわて沼宮内駅は全国最低の乗降客数であったが、最近北海道新幹線の奥津軽いまべつ駅が最下位となり、2番目になってしまった。

先日岩手町が町で唯一国のSDGs未来都市に認定され、それに基づき、町民が認識を新たに、役場と連携して、持続可能なあらゆる分野での町おこしをスタートさせた。

県の芸術文化協会の会長を務めているが、10月に第73回岩手芸術祭が開幕し、来年の2月末まで多彩なイベントを繰り広げる予定である。新しい生活様式にのっとなって、動画配信も織り交ぜている。このご時世での開催に喜びや励ましの声をいただいている。

園井恵子氏の考えである実行と反省、さらに実行をモットーに活動している。園井恵子氏は八幡平市の松尾村で生まれ、岩手町の川口で育った。その後宝塚歌劇団を目指し、特別に入学を許可された。広島原爆で被爆し、32歳で亡くなった。短い人生に非常に教えが多く、地元の人間としてそれを若い人たちに語り継いでいくべきと平成6年から活動している。

岩手町で個性的に活躍している5人のメンバーでアウローラJ5という町おこしのグループを設立した。農林水産省からの助成金を活用し、去年インバウンドを対象としたイベントを実施した。今年2月にもイベントを実施した。

自分の住んでいる町をよく知り、郷土愛を持つことが大事と考え、活動している。

◆ 意見交換

○小西和子議員

自分たちの活動の自慢は何か。

また、岩手県にお願いしたいことがあれば、お聞きしたい。

【回答：江頭さん】

震災の5年後くらいであったが、移住前に岩手県に旅行に来た。非常に気持ちが安らぎ、居心地の良さを感じた。その後、年1回のペースで岩手県を訪れているうちに、だんだん岩手県に住みたくなかった。

岩手県の中で住む場所を決めた基準が岩手山であり、雫石町から見た岩手山の景色の視界が非常に広く、気持ちまでおおらかになる感じがあり雫石町に住むことを決めた。

気持ちが穏やかになれるところが、岩手県の魅力と感じている。

○佐々木宣和座長

沢田さんに、シェアハウスを立ち上げたきっかけを含めて、地域の魅力を聞きたい。

〔回答：沢田さん〕

シェアハウスを立ち上げたきっかけは、3年前に八幡平市で実施していたプログラミングのイベントに参加したことで、八幡平市に魅力が多いと感じた。地域の人が自分たちで事業をしていたり、松尾鉦山の影響か、外から来た人を受け入れやすい雰囲気があると感じた。

プログラミングのイベントには全国から参加者が集まってきており、八幡平市を面白いと感じ、住みたいと思った人が住める場所を作らなければと思った。

八幡平市にはつても友達もなかったが、市役所に紹介してもらった地元の不動産を持っている人を訪ね、シェアハウスをやりたいという思いを伝えたところ、物件を貸してもらえ、シェアハウスを始めた。

○佐々木宣和座長

事前資料の中に、シェアハウスをやりたい、ではなく、面白い人が来るからシェアハウスが必要だ、という発想でシェアハウスを始めたということが書いてあり、この考え方がものすごく大事と感じた。行政は、作ることを決めてから入る人のことを考えてしまうが、そうではないところが素晴らしいと感じた。

〔回答：沢田さん〕

市役所に行く前に空き家バンクに相談したが、登録物件も少なく話も遅く、自分でやった方が早いと思って動いた。

地元の不動産会社にも相談したが、このような地域でシェアハウスは無理だと言われた。

○名須川晋議員

外部からお客様を招くことに携わっている方に、コロナウイルスの影響で、今後どのように変わる、変わらなければならないかを聞きたい。こう変化していくことで、都会の多くの方に地方に目を向けて、来てもらうことができる、ということがあれば、聞きたい。

〔回答：北田さん〕

業界が今後どうしていくべきかはまだ分からないが、個人的には、旅行者の人口はコロナウイルス収束後は減ると考えている。安売りの施策に慣れた方は戻ってこないと考えるし、仕事を失った方がいると観光に使うお金も減ると思うので、今後は厳しいと考える。

岩手県は、当初感染が拡大しなかったのが優位性があると感じていたし、地方に目が向いている時代であるが、コロナ前から、受け皿づくりなどできていないことがとても多かった。コロナ後もそれが続いていると逆効果である。一級観光地を抱えている地域の巻き返しは今後大きいと考えるので、今のうちにできる手を打っておくべきと考える。

また、岩手県で観光に携わる人が減ることに不安を感じている。関東圏で観光のスペシャリストとして活躍していた方が、けっこう地元に戻ってきている。海外専門の旅行会社で働き、スペイン語が堪能な方から求職の話があっても、岩手県で受け入れられるところがない。様々な分野の、能力の高い人が地方都市に戻っているが、その人たちが働く場がないということに悩んでおり、そのような方々を捕まえて、観光人材育成などで活躍してもらおう場を岩手県内に作り、価値を上げていくことが必要と思う。

〔回答：畑さん〕

当社では、Go To トラベルの第三者機関となっており、デジタルで予約されない方がGo To トラベルを使うために、当社に登録し割引を得られるようにしていた。Go To トラベルは大きな明暗が分かれたと感じている。観光は、施設にも投資をして、努力して、サービスを磨いている、より水準の高いところにお客様が動いているのは間違いないと考えている。コロナ禍の後は、より洗練されたサービスなどのお客様が一層満足できるところにお客様が偏り、勝ち組・負け組が大きく決まっていくと感じている。

今年、観光庁の事業で誘客多角化等のための魅力的な滞在コンテンツ造成実証事業という、最大2,000万円の定額補助の事業があったが、その事業でコロナ対策のための非常に厳しいマニュアル作成が義務付けられていた。今後は旅行者も、受け入れ側のコロナ対策を重要視してくると思っており、このようなコロナ対策を地元にしっかりと根付かせていくことも重要と考えている。

コロナの影響で団体旅行が壊滅的な被害を受けて、個人の、そして都会ではなく地方の自然を楽しむリゾート地の流れが向いており、岩手県の観光地は今が頑張りどころである。今後、岩手県の観光の価値を高めて、お客様に高い満足を提供していけるかが、観光の大きな肝であると考えている。

八幡平市からも岩手山の眺めがきれいである。岩手山の眺めが世界一の場所を作りたいと考えており、レストラン等の複合施設を作ろうとしている。

〔回答：櫻糰さん〕

雫石町グリーン・ツーリズム推進協議会では、仙台市を中心に年間10校前後の小中学校の教育旅行を受け入れている。毎年コンスタントに来てもらっているのは、雫石町の魅力に取りつかれた子供たちの様子を先生によって語り継がれていたり、エージェントが推してくれているのが大きかったのだろうと思う。野菜嫌いの子供が農業体験をして、自分が触った野菜が好きになったという話も聞く。体験する、触れるということを学習することが基本になっているので、毎年千人くらいの子供達が来てくれている。

コロナの影響で今年はお断りをしたのだが、来年の予約が既に入っている。これは長い歴史の積み重ねが、雫石町の魅力を発信しているのだと思う。このことは岩手県全体に言えることだろうと思う。このような活動が岩手県全体に広がればいいと思っている。

○千田美津子議員

皆さんから、感じている地域の魅力を聞き、うれしく思った。

柴田さんの取組の話をもう少し詳しく聞きたい。

また、葛巻町も子供たちを大事にし、全国から人を呼んできている町である。中橋さんから、自然を生かした取組について詳しく聞きたい。

また、木村さんは多角化経営されているとのことであるが、今後の展開をどのように考えているのか聞きたい。

〔回答：柴田さん〕

園井恵子氏は方言もあり、踊りや歌などの経験も全くない中で宝塚歌劇団に入り、さらに家族が彼女を頼って宝塚に移住し、彼女が家族の生活を担いながら宝塚歌劇団の生徒として舞台に出ていた。ものすごく苦勞し、「地獄を突き抜けたところに極楽がある」という父の教を身をもって体験しながらトップスターになった。岩手県から宝塚歌劇団のトップスターになったのは彼女しかいない。そのような方がこの岩手町にいたことをうれしく思っている。

町を作っている人々の人間性の教育が大事であり、その教育に園井恵子氏を役立ててもらいたいと思ひ、地元の子供達に出前講座をしている。彼女の母校の川口小学校にブロンズ像を建立したが、子供達が掃除をし、その前で将来の夢を語ってもらひ、素晴らしい先輩がいるということの糧にして学習している。そのようなことが、ふるさとを誇りに思うことにつながり、ゆくゆくは地元に戻ってきてくれるのではないかと思っている。

地元の自慢は北上川であり、岩手町は北上川の源泉地である。そういったことも観光に役立てていきたい。地元の宝を一つ一つ掘り起こし、これから頑張っていきたい。

〔回答：木村さん〕

これまで交流人口の拡大については、「来場」のように直接的な交流が指標であった。コロナウイルス感染症拡大に伴い、距離を保たなければならなくなり、現地に出向いていくことができなくなっている。来年にはワクチンが開発されて全国に普及されれば、それが解消されるだろう、という楽観視もできない。よって、これまで私たちが常識としてきた直接的な体験・交流は理想としつつも、別な手段を考えていかなければならないと思っている。

その一つとして間接的・多面的な交流人口の拡大に取り組んでいかなければならないと考える。これまで牧場を教育現場として解放してきた。牧場で体験して、子どもたちに畜産のすばらしさや食の大切さなどを教え、その素晴らしさを他の人に伝えていく広がりや45年やってきた。このような直接的な交流が出来なければ、GIGAスクール構想により全ての小中学校にWi-Fiやタブレット端末が導入されるので、そこに我々が接続できる手段があれば、毎月のように全国と交流できるようになる。直接的な体験学習に勝るものはないとは考えるが、早々にこの状況が解消されるとも思われないので、間接的に学校とつながりを持って、交流人口を拡大していくということがこれから必要になってくると思っている。

〔回答：中橋さん〕

アフターコロナ時代になっても以前のようにお客様は戻らないとみているので、お客様が来始めた時にどういったことができるかと考え、例年、盛岡市や八戸市から収穫祭を楽しみにしていた方を対象に、リモート収穫祭を初めて開催した。ワインの売り上げが低迷しているが、新酒のワインをセットで販売し、家でワインを飲む機会を作ろうとこのような企画をした。今回のことで今後の可能性を感じ、方向性としては良かったと思っている。

○高橋こうすけ議員

SNSやYouTubeを活用されているようだが、インターネットを活用した情報発信にどのようなことを心掛けてきたのかをお聞きしたい。

〔回答：沢田さん〕

よく市役所などでSNSのセミナーがあるが、誰でも分かっているような内容が多い。自分は29歳なのでネットが当たり前の世代である。シェアハウスとスナック経営の他にネットを使った事業もやっている。SNSはスナックで活用している。今コロナウイルスの影響で市内でも人が歩いていない。SNSはそれぞれ年齢層の幅が違い、Facebookは40代以降や企業が主に使っている。Instagramは20～30代が中心、Twitterは全世代が利用しており、使い分けている。SNSとリアルな店舗経営を掛け合わせると将来性があると感じている。SNSは無限の可能性があるが、諸刃の剣であると思う。使い方によっては、自分のように一人で知らない地に来て、事業をしていく上でかなり武器になると思う。

〔回答：北田さん〕

情報発信にSNSを活用しているが、SNSはあくまで現段階では発信ツールであるので、きちんと情報があるページにつながるよう意識している。

また、やります、ということだけでなく、やりました、ということもSNSで発信している。本当にやった、ということが信頼を勝ち取る手立ての一つだと思うので、どのような人が来たのか、こんな声があった、ということ発信している。

移住ツアーでは、SNSで検索してその地域の盛り上がりなど、補足の情報を調べている人も多く、SNSは重要であると思っている。

〔回答：畑さん〕

市内でアフターコロナを意識したコンテンツ造成をしている。今手掛けているのはオンラインツアーの造成である。首都圏の方では既に、元バスガイドなどがインバウンド向けに実施しており、オンラインサービスなどを活用すれば一度に数千人が一緒に見ることもできる。低価格で行ったつもり、体験したつもりになり、その地域のことを知ってもらえる。

八幡平市では、一昨年から鷺の尾の酒蔵見学と鷺の尾に関する農作物や水の源泉地などを見学した後に、八幡平市の食材と鷺の尾のお酒を楽しんでもらうモニターツアーをやっていた。今年はその代わりに台湾向けに鷺の尾のお酒を送り、オンラインツアーで蔵見学などを楽しんでもらう取り組みもスタートしている。

SNSに関しては、台湾と、安比高原などのスキー場に興味が深いオーストラリアに情報発信している。FacebookやInstagramで、広告も活用しながら使っている。

○小野共議員

雫石町グリーン・ツーリズム推進協議会では、年間千人程度の利用者がいるとのことであったが、人気のあるメニューは何か。また、なぜそれが人気があるのか。

〔回答：櫻桃さん〕

農家に住んで、一緒に料理を作って食べるというものが人気がある。団子やたくわんなど昔ながらの料理を子供達と一緒に作って食べるというのが喜ばれている。さらに一緒に農作業をしたり寝泊まりし、一泊二日の体験で都会では体験できない田舎の良さ、人柄の良さに魅了されてまた来たくまっているのではないかと推察している。

子供達には、土に触れるなどの体験を求めているのではないかと思う。

○小野共議員

一泊いくらくらいなのか。

また、グリーンツーリズムの課題と行政に望むことを伺いたい。

〔回答：櫻桃さん〕

体験料を含めて七、八千円前後である。

課題は受入農家の高齢化である。高齢化により自分たちの生活で精一杯で、子供たちの面倒まで見れない、という農家が毎年増えている。受け入れ体制を整えるために、受け入れ農家を増やしていくことが課題であると感じている。

行政に望むことは、人を育ててもらいたい、ということである。何か作ったりイベントを開催する

際の補助金はあるが、人を育てることについての補助金がない。人が面白ければ人は集まる。面白い人を育てる事業をしてもらいたい。

○小野共議員

具体的に、面白い人を育てるにはどうしたらいいと考えるか。外から来た人は、元々住んでいた人が当然と思っていたことに魅力があると発見してくれ、貴重な存在である。釜石市でもグリーンツーリズムの事業をしているが、外から人を呼んで、違った目線で見てもらい地元の人が当然と思っていたことが面白い、と言われメニューに加えている。そのようなことに気づく、面白い人というのはどう育てられるのか。

〔回答：櫻糞さん〕

岩手県人は自分を主張しない地域性があり、外から来た人の方が違う角度で地域をよく見ている。外からそのような人を連れてくるのが手取り早いですが、それだけではだめであり、地元からそのような人を発掘しなければならないと考える。それを具体的にどうするのかは難しい。

○工藤勝博議員

交流人口といっても幅が広い。様々な角度から岩手県の人口減少に対して、交流人口を拡大しながら岩手県の魅力を発信することが必要である。

岩手県では4月から観光・プロモーション室を設置している。また、来年は東北デスティネーションキャンペーンがあり、地元の魅力を発信するチャンスであると考えますが、それにどのように取り組もうとしているか。

〔回答：北田さん〕

岩手県のコンテンツは個人向けのプログラムに弱い。団体向けのプログラムはよくあるが、今後密を避けるためにも、個人型のものに対応できれば難しい。デスティネーションキャンペーン向けのプログラムも5人程度で受け入れられるようにしていかなければ、来てもらえない。そこをこの短期間で対応できるようにしていけるのが課題である。今のプログラムでは、新しい生活様式に対応していけないと危惧している。

〔回答：畑さん〕

デスティネーションキャンペーンは、来年の4月から9月まで、東北六県と仙台市で実施されるJR東日本の大規模な観光キャンペーンであるが、これだけ長い期間、広域で実施するものはこれまでなかったと聞いている。

東北観光推進機構が去年から力を入れているのが、観光コンテンツの収集である。「旅東北」というサイトで体験コンテンツを掲載しているが、情報が羅列されているだけで、そこから予約ができず、もったいないと思っている。そこから予約し、決済までできるシステムが今後重要と考える。

八幡平市でも、コロナ対策をしっかりとプログラムを検討中であるが、今後、当社のウェブサイトで予約から決済までできる体制を整えるつもりである。それを今後、東北全体で整えていくことが大切であると思っている。

今は、何ができるのか、どんなサービスがあるのか、何が得られるのかといった目的型の旅行が増えており、雄大な岩手県の景色の中でゆったりと過ごしてもらうためにたくさんの人に来てもらいたいと思っているので、デジタル対応・IT化を推し進めていく施策を考えてもらいたい。

○佐々木宣和座長

出席者の皆様から何かないか。

〔回答：柴田さん〕

人を育てることについてだが、大人になってからでは遅い。子供の頃の体験が人を作るので、地域全体で育てる、という意識を持った教育をしてもらいたい。人を育てるための施策を盛り込んでもらいたい。

自分の地域だけでなく、広域で連携することも大事だと考える。新幹線も大事だが、IGRもあり、スローな、心にしみる旅をしていただくためにその良さをアピールしていきたいと思っている。岩手町には3つの駅があるが、それを利用して交流人口を増やしていきたいと思っている。

一人ではできないので地域の皆様と連携し、ともに栄えていきたいと思っている。

◆ 感想など

○柳村一議員

地域の資源がたくさんあり、皆様がそれを生かして観光や地域振興につなげているのは素晴らしいと感じた。これまでの観光は大量消費で、県もインバウンドの入込客数を指標とし、定量消費に目が向いていたが、皆様の地域に根差した活動をお聞きすると、今後は多様性の時代なのかと思う。付加価値を付けなくても既に岩手県に付加価値があり、それをどのように情報発信していくのかに目を向けて事業を展開するべきなのだと思う。

○佐々木茂光議員

それぞれ、どうしたらいいのかと悩みながら行動を起こしているが、自分たちだけ、ではなく地域が一丸となって一つの目標に向かって進むことが大事であると考え、それを行政がバックアップしていき、動きをさらに大きくしていくことが大切だと思う。

今日の話共有し、皆様の後押しをしていきたい。

○佐々木宣和座長

交流人口を拡大するために観光に力を入れてきたが、コロナ禍で今後どのように変化したらよいか、今まであった課題を洗い出さなければいけないと思っている。

これまで団体旅行に依存しており、それに対応するように宿泊施設を作っていた。コロナ禍で団体旅行が来なくなり、個人客に対応したサービスをつくることができていない。ただそれをしつていかないと生き残っていけない。

デジタル化の中で個人に着目したサービスが生き残っていくと思っており、ウェブ媒体で自分たちがやっていることを正確に伝える人とどれだけつながれるかが重要と考える。ウェブを通じることである程度人数が集まり、ビジネスが成り立つ時代であるので、それぞれの地域の磨き上げと情報発信を連動していくことが重要と思っている。

マーケティングで数字をどうやって把握していくのか、全体的な数字とそれぞれの地域での動きをどう連動させていくのが大事であるが、なかなかできていないことが課題と考えている。

本日いただいた御意見、御提言については、県議会全議員と情報共有し、今後の議会活動にいかしていく。本日はお忙しいところ、御参加いただき、感謝申し上げます。